



帰国報告：ラオス MaWaSU プロジェクト

チーフアドバイザー 下村 政裕

ラオスのプロジェクトについて、プロジェクトのチーフアドバイザーを5年間務め、8月に帰国されたばかりの下村さんに、プロジェクトへの想いをまとめていただきました(事務局)

Project MaWaSU

日本の水道事業体の協力のもと、JICAがラオス国で実施した、Project MaWaSU についてご紹介します。正式名称は、「ラオス国水道公社事業管理能力向上プロジェクト」で実施期間は、2012年8月24日から2017年8月23日までの5年間。愛称は、英語のプロジェクト名の頭文字から「Project MaWaSU」とカウンターパートの皆さんがつけてくれました。

MaWaSU のプロジェクト目標は、名称通りで、MaWaSU 開始前には、水道施設の運転維持管理のみを場当たり的にしかやってなかったラオスの水道事業体である18県の水道公社が、それぞれの県民のために、長期的視点を持って、有効かつ適切な施設経営、水道事業運営ができるようになること。そして、そのためには、公共事業である水道を進めていく上で、水道公社のみでは企業性からくる限界もあることから、水道事業運営の善し悪しを大きく左右する水道行政能力の向上も重要なことであり、この双方の組織力向上に向けてアプローチする活動内容となっています。



クロージングセミナーのグループ集合写真

34号 目次

帰国報告：ラオス プロジェクト下村さん・・・	1
大阪集会 報告	3
日本水大賞 厚生労働大臣賞 受賞！・・	6
第4回 幹部フォーラム.....	7
SDDC.....	8
Mr. Varich 歓迎.....	9



8月の最後の例会会議打上げ時の挨拶（下村さん）

MaWaSU のアプローチ

プロジェクト目標へのアプローチの方法としては、ラオス全国18の県の水道公社から、北部、ルアンパバン県、中央部、首都ビエンチャン市及び南部、カムアン県の3つの水道公社をパイロット水道公社として選定し、まずは、これら3つのパイロット水道公社の事業管理能力を向上させるための活動と、国及びパイロット県の水道行政のあるべき姿を目指す活動を実施しました。

そして MaWaSU の後半では、国とパイロット県の水道行政担当と水道公社へのアプローチを引き続き継続すると共に、前半で、水道事業活動に対する正しい理解や取り組みができるようになってきた3パイロット県の水道行政担当と水道公社を核として、それぞれのエリアのパイロット以外の県の水道調整担当と水道公社に対して、MaWaSU の取り組みを順次展開していく活動と、MaWaSU 終了後に、MaWaSU 活動をスタンダードとしてラオスの水道界に広く定着させるための全国展開システム設計を実施しました。

MaWaSU のチャレンジ

こうした我々の取り組みである MaWaSU の 5 年間を一言で言えば、「ラオスの水道セクターの新たな時代に向けたチャレンジ」を試みてきた 5 年間といえ、大きく、二つのチャレンジをしてきました。

なぜ、新たな時代に向けたチャレンジが必要なのか？このことを MaWaSU メンバーに理解してもらうこと、特に、今までラオスの水道界を護送船団のごとく引っ張ってきた水道行政の仲間の皆さんに理解してもらうことが、我々専門家側の大きなチャレンジであったと MaWaSU が終了した今、振り返るところです。

そして二つの大きなチャレンジの一つ目は、水道の原点に立ち返ること。目先の課題にとらわれ過ぎることなく、長期的視点をもって、国民の公衆衛生の向上と水道による快適な暮らしを確保していくことを目指しました。

これは、未だに 5 歳までの乳幼児死亡率が非常に高い中で、国民の全てで安全な水へのアクセス実現が急務であること、都市部を少しでも出れば、未だに、女性と子供たちが、水汲みという重労働にかなりの時間を割いていること、それが、畑仕事などと合わせ、子供たちが学校へ通わない一つの理由になっている可能性があることなどの背景によります。

二つ目は、新たな時代に適合した水道セクターへと再構築するためのチャレンジで、これは、ここ 20 年、ラオス国を挙げて各国等のドナー支援を全面的に仰ぎながら水道の普及促進をしてきたにもかかわらず、全国における現在の水道普及率は 20% 足らずに終わっていることに代表されるように、今まで通りにやっていたのでは、ラオス国も目指す国連の SDG、Drinkable Water For All は、実現どころか、大きくかけ離れた結果となることは、想像するに容易いこと、などによるものです。

行政と事業の差別化に向けた取り組み

具体的なチャレンジとしては、行政と事業を明確に区分し、それぞれがその役割を、より有効かつ効率的に果たすことにより、ラオス国水道セクター総体の自立発展を促すこととしました。国の護送船団方式を卒業させ真の地方分権を実現する、すなわち行政機関と事業主体をその使命と共に明確に区分・規定し、それぞれの役割を有効かつ効率的に果たすことを目指したわけです。ドナー支援偏重型の水道セクターから自立型水道セクターへと再構築をしていくために、国や県に対しては、施設建設とい



原動力となった例月会議のうち、分科会活動

う直轄事業を地方水道公社に完全に委譲し、水道事業体が進めるべき施設建設・整備も含めた事業推進支援、監督、規制業務などの水道行政に専念すること、県による地方水道行政と県営水道公社の実施する水道事業との強力な連携により県内の水道事業活動の長期的な具体化を行い、県民への水道の普及促進と水道サービスの向上を確保できるような支援を試みました。

MaWaSU の支援マネジメント

MaWaSU では、水道事業を実施していくためのノウハウや技術を、実際の事業の最前線の現場で経験と共に培ってきた水道事業のプロとして、主にプロジェクト期間のみの活動を明らかにしている PDM にとられることなく、水道の使命を全うすることを目標に掲げ、水道の理想像を 10 年後の将来像として描き、そこに向けた最初の 5 年間は MaWaSU であると位置づけ、必要な活動とそのロードマップを設定して実施してきました。

具体活動は、3 パイロット水道公社においては、長期的視点に立って、水道事業を運営していくために日々やるべき活動を各事務事業担当の皆さんとの OJT 的活動で支援すると共に、行政の皆さんとは、行政課題を明確にした上で、課題ごとに担当を決めてもらい、各担当との定期的な勉強会を実施することにより、課題解決能力の向上を目指してきました。これらの活動により、各メンバーが何のために何をしなければいけないのかを明らかにし、彼らのモチベーションを高めながら、どのようにするのかの手ほどきをしてきました。

途上国への思い

支援をするにあたって、私の思いとしてこだわったことは、今の日本を持ち込まないということでした。実際に、ラオスの水道界の現状は、私が日本の水道界に入ってからと非

常に似ていました。なので、当時、日本では何をしてきたのか、日本での結果にはこだわらず、当時の思考回路のようなものを持ち込むことを大いに意識しました。このことは、もう一つ理由があって、電力事情は依然として好ましくなく、更に IT の事情は、日本のコンピュータが導入されたところに近いものがあり、コンピュータの全くない職場が当たり前であるといった事情から、ハイテクに頼るより、マニュアル、ペーパーベースの業務手順の導入を図った方が、お客様からの信頼を得られやすい確実な仕事ができること。加えて、マニュアルベースのローテク手順を導入することにより、仕事の原理原則が理解しやすく、このことが、5 年後 10 年後にシステムが導入されたときに、システムに使われることなく、システムを使って適正かつ効率的な仕事ができるようになるという私の信念に基づいた取り組みでした。

更に、これは言わずもがなですが、あくまでもカウンターパートが主役であり、我々専門家が成果を出しても意味がなく、カウンターパートが成果を出して初めて我々専門家が評価されるということであり、隣に座って粘り強く指導しながら、彼ら自身で結果を出すということにこだわりました。

MaWaSU の真の原動力

MaWaSU メンバー個々との活動に加えて、組織力向上という全体としての成果発現に向けた取り組みとして、パイロット水道公社には週会議を設定していただき、各担当の活動の進捗管理を行いました。また、毎月、行政担当と水道公社のプロジェクトメンバーが一堂に会して、MaWaSU 活動全体の目標に向けた進捗管理や活動調整を行ってきました。

また、人材育成や水道ビジョン、水道事業ガイドラインのような、オールラオスとして取り組むべき課題は、分科会と称する委員会を最終的に 9 つ設置して毎月例会議

に合わせ、検討会を実施してきました。これらの MaWaSU メンバー全員が集まる定期的な試みが、良い意味での競争を産み、かつおせっかいなラオス人気質から、協調・連携も生まれ、これらのハーモニーが MaWaSU 最大の原動力になったと評価しています。

もう一つの MaWaSU

ここまででは、本流の活動について報告をさせてもらいましたが、当 MaWaSU のもう一つの取り組みとして、日本の大学生や大学院生のインターンを、積極的に受入れさせてもらいました。若い水道事業体の職員を含む日本の若い世代の人達に、水道というものを正しく理解してもらいたい、国際協力とはどういうこと？人間関係の形成には何が必要なのか？ということについて思いを巡らせて欲しいとの思いから、「来る者は拒まず」、で MaWaSU に参加してもらいました。将来の水道 People や水道サポーター、あるいは国際協力の担い手の育成に、僅かながらも貢献できたかなと自負しているところです。

Post MaWaSU に向けて

終わりに、MaWaSU の最大の成果は、以上の考え方やアプローチを水道公社の皆さん、そして行政の担当レベルの皆さんが、完璧に理解をしてくれて、目標達成に向けた日々努力を始めたということだと思っています。ただ、国のトップレベルの皆さんには、まだまだ旧態依然の考え方を捨てきれず、ドナーだよりで良いのだという思いが残っている状況の中、真の地方分権に向けた具体活動が最後までうまく動かなかったという面もあります。

この悪循環を好循環にしていくこと、そして MaWaSU 活動をラオスのスタンダードとしていくために、JICA には、Phase II の立上げを強く望んでいるところです。(了)



原動力となった例会会議風景



最高に盛り上がったクロージングセミナー風景



2017 年 大阪集会 報告



2017 年 9 月 1 日 19 時より第 4 回目となる大阪集会が開催されました。今回は、昨年 2 月から今年 8 月までラオスへ JICA 長期専門家として派遣されていた松山市公営企業局の佐伯孝志さんに帰国報告をしていただきました。(事務局注: 前の記事の下村さんは同じプロジェクトのチーフアドバイザーです)



杉野 学
(大阪広域水道企業団)

出席者は、講演者の佐伯氏と、地元大阪から、宮内(日水協)、長塩(阪神水道)、藤谷、尾崎(堺市)、北川(関西技術コンサルタント)、Trang Nguyen(神鋼環境ソリューション)、林、孝石、杉野(大阪広域水道)の 9 名、東京から笹山(日水協)、山本(事務局)の 2 名で(以上敬称略)、12 名の会員が参加し、また水道事業体(大阪市、阪神水道、橿原市、京都市、大阪広域)の現職、OB や民間企業の方など 12 名の会員以外の参加もあり、総勢 24 名で盛り上がりました。

はじめに代表の山本さんから、この大阪集会への参加者が毎回多いことについて、関西の海外協力に対するポテンシャルの高さを感じるとのお話がありました。

また、今年 7 月に WaQuAC-NET の活動が第 19 回目の日本水大賞に選ばれたことが報告されました。

集会後の懇親会には参加者のほとんどが参加し、参加者同士の活発な交流が行われました。内容を以下に紹介します。



講演する佐伯氏

講演概要

佐伯さんは 1 週間前に約 1 年半のラオスでの活動を終えて帰国されたばかりで、松山市公営企業局への復職等でお忙しい中、この大阪集会にお越しいただきました。

2 年前の大阪集会に参加されたときに、海外に行きたいという思いが高まり、その後すぐに JICA の長期専門家に選ばれたそうです。松山市公営企業局で初めての長期専門家であったこともあり、初めは退職して参加されることを考えられたそうです。しかし、その時に「こんな優秀な人材を失うのはもったいない」との話が持ち上がり、企業局の職員として派遣が決まったそうです。(詳しくは、[会報 28 号](#)をご覧ください)

1. ラオスの特徴

- ・人口増加率は約 1.5% で、東南アジアの中ではそんなに高くない
- ・国土の 7 割が高原や山岳地帯
- ・人口の平均年齢が 20~30 代の比較的若い国

2. ラオス水道公社事業管理能力向上プロジェクト

- ・2012 年 8 月~2017 年 8 月の 5 年間のプロジェクト
- ・18 の水道公社がある。
- ・水道公社の中長期的視野に基づく事業管理能力の強化を目的
- ・佐伯さんはプロジェクト 4 年目~5 年目にかけて担当し、3 水道公社を対象とした。
- ・3 水道公社を約 1 か月で定期巡回し、短期専門家と共同でカウンターパートへの OJT を実施
- ・多数の日本の水道事業体が連携を行っている。

3. 見たこと

ラオスの様子について多くの写真を交えて紹介された。特に印象深かったのは、食(珍しい食べ物:リス、カメ、トカゲ、カエル、虫)、市場、花、メコン川、世界遺産の都市(ルアンプラバン)。首都ビエンチャンはタイに面しているものの、その周辺では早朝にお寺へお供え物をする仏教国ならではの風景が残っている。ラオスでは「開発や成長は望むが、急激なものは望まない」ということがよく聞かれた。

4. 取り組んだこと

(1) データ管理改善計画の促進

データ管理マニュアルがあり、対象となる 47 郡データの中で、何らかの理由でデータが存在せず、また、日常の業務改善では行えない規模のデータに関する改善に向けたスケジューリングと、その具体的な取組みの実施を促進した。

達成状況については、業務系のデータは一担当者で何とかなるケースが多く、本プロジェクトにより一定の改善があったが、技術系のデータは一担当者ではなくチームとしてやることが多く、引き続き、課題として継続する部分がある。

(2) 施設の維持管理状況にかかる課題分析

- ・カウンターパートは1つ1つケーススタディを通して課題を認識する。
- ・カウンターパートは課題を分解することで説明できるようになる。STEP①経営層の課題なのか、STEP②施設・業務本来の課題なのか、STEP③可視化・定量化が課題なのか、STEP④情報の課題なのか

達成状況については、短期間では分からないが、課題について説明できるようになってきた。ただ、分野が跨るような大きな問題については今後の課題として残る。

(3) 事業計画の策定・実施支援

- ・長期計画、中期計画、予算／決算計画のように計画内容を具体化していく。あわせて下からも計画の実施精度を上げていく。
- ・職員個人にも毎月の計画を立ててもらい、実施してもらった。

達成状況については、進捗管理の精度が徐々に上がってきた。個々の事業の実施を積み上げる「アリの目」と、俯瞰的な観点で監視する「タカ目」の基礎が身についたのではないかと。

(4) 事業モニタリング

- ・業務指標 (PI) 23 項目を用いたモニタリング手法の定着
- ・PI の算出結果には、大きく 2 種類 (状態の把握と状態の監視) の意味があること
- ・PI 以外に定性的な評価も併せて行った。
- ・年に 1 回の評価: 達成状況については、これからも情報の蓄積と分析の評価の継続が必要で、新たな PI の

必要性も出てきた。

(5) 水道事業体連携

- ・日本の水道事業体と色々なスキームの連携 (埼玉県専門家、埼玉県の草の根活動、札幌市水道局の日水協シニア専門家)
- ・専門家同士で刺激を受け合い、自らの専門性だけでなく、人間性を向上することができた。

感想

今回、帰国されたばかりの佐伯さんから国際協力に対する熱意をどう実現されたかについて具体的にお話を伺うことができた。

講演の中で、2004 年にカンボジアでボランティア (青年海外協力隊) をされていたというお話があった。昔から佐伯さんには海外協力の思いがあったのだということが垣間見えた。

最後に、佐伯さんは、1 年半の専門家派遣の感想を「楽しかったし、しんどかったし、充実していた」と表現された。

さらに、結果にコミットする難しさについて語られたところから、佐伯さんの本プロジェクトに対する取り組みの真剣さを感じた。

年に 1 回ではあるが、国際協力に熱い思いを持たれている方が集まるこの大阪集会は、新たにエネルギーを受ける良い場ではないかと思う。特に今回は、佐伯さんの高い志に感銘を受け、同じく国際協力に熱い思いを持たれている参加者にエネルギーを与えることとなったのではないだろうか。

懇親会では、「私も行きたいと思った」という感想をいくつも伺ったのが印象的だった。(了)



懇親会の様子

WaQuAC-NET 第 19 回 日本水大賞を受賞 !!

2016 年 8 月に WaQuAC-NET 会員の A 氏から日本水大賞への応募を勧められ、応募締め切り前日の 10 月 30 日に WaQuAC-NET の活動目的や活動内容を書いて応募しました。待つ事 4 カ月、2017 年 3 月 8 日、日本水大賞委員会の事務局である河川協会から日本水大賞・厚生労働大臣賞受賞の電話が来ました。翌日は、タイミングよく WaQuAC-NET の総会の日で、参加された皆さんに報告することができました。その後 ML で会員の皆さんに報告し、日本水道新聞等にも掲載されたため、たくさんの方からお祝いのメールが届きました。会員からは「このような賞をいただいて会員として誇りに思います」というメールが届き、受賞の反響の大きさに驚きました。

実は、応募を勧められた時、日本水大賞について全く知りませんでした。調べてみると、すでに 18 回実施され、地域の環境問題に取り組む NPO や学校の活動が受賞していることがわかりました。しかし、WaQuAC-NET はインターネットを通しての地味な活動であり、日本水大賞の対象となりうる活動なのかと戸惑いました。数人の会員に相談したところ、彼らの返答は大変ポジティブでした。「活動を広く知ってもらいよい機会」、「海外も含めて、メンバーの励みになる」、「新たな会員の発掘にもなり、応募して損はない」、「国際貢献賞が十分に狙える」、「メンバーにアピールできる」、「審査委員に十分に評価される」、「副賞で活動費が潤う」、「知名度が上がる」などなどの言葉に背中を押されて応募しました。受賞が決まってから届いた皆さんの喜びのメールを見て、思い切って出して本当に良かったと思っています。

2017 年 7 月 11 日、バイエリアにある科学未来館にて秋篠宮ご夫婦列席の元で行われた表彰式と受賞活動発表会には、佐々木さん、小野さんと共に出席しました。2008 年に始まった WaQuAC-NET ですが、会員はじめ多くの皆様の支援の下、続けてきた活動が評価され、日本水大賞・厚生労働大臣賞の受賞に至りました。皆様のご協力に感謝し、受賞を励みに今後も地道に活動を続けていきたいと考えています。

（事務局 山本敬子）

授賞式に出席して 小野好信

第 19 回日本水大賞 厚生労働大臣賞の受賞、まことにおめでとうございます。WaQuAC-NET の途上国に対する長年の取組が評価されたものです。今回縁があって授賞式に参加させていただきました。表彰式は、秋篠宮殿下ご出席のもと、日本水大賞および各大臣賞を受賞された方々と共に緊張感のある中での開催となりました。各賞の取組も聞かせていただきましたが、水にかかわる地域の歴史を伝える教育活動、防災、水源林保全など、どれも水に関する特徴的な活動ばかりで、幅広い活動に感心するとともに大変勉強になりました。その中でも、WaQuAC-NET の取り組みは「安全な水」をキーワードに専門家集団がアジア地域の方々と繋がりながら行っており、人的にも地域的にもこれからの広がりも想像させる活動だと感じました。正直、WaQuAC-NET を発展させてこられた諸先輩方を差し置いて表彰式に出席させていただくのは気が引ける面もありましたが、今回の受賞を通じて WaQuAC-NET の活動の大切さを改めて実感することが出来ましたので、これからも、微力ながら活動に協力していきたいと思っています。（了）



表彰状授与



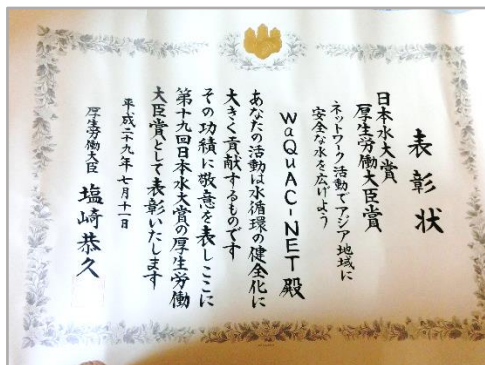
活動発表



全体記念撮影



左から小野・山本・佐々木(敬称略)



日本水大賞について

21 世紀の地球全体を視野に入れて、水循環系の健全化や水防災に対する安全性の向上に寄与する活動に取り組む個人、NGO/NPO、学校や企業、行政などに贈られる賞。「日本水大賞委員会」及び国土交通省の主催。1999 年より実施され、今年で第 19 回となる。優れた活動には次の賞が与えられる。1) 大賞(グランプリ)、2) 国土交通・環境・厚生労働・農林水産・文部科学・経済産業の各大臣賞、3) 市民活動賞、4) 国際貢献賞、5) 未来開拓賞、6) 審査部会特別賞。第 4 回からはスウェーデンで開催される青少年を対象の国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞」に参加する日本代表の選考を兼ねた日本ストックホルム青少年水大賞が設けられた。

<http://www.japanriver.or.jp/taisyo/jyusyoushiki/no19/index.htm>

第 4 回 アジア幹部フォーラム 参加報告 鎗内美奈(事務局)

2017 年 8 月 1 日～4 日、JICA と横浜市の共催で、第 4 回 アジア地域上水道事業幹部フォーラムが横浜市で開催された。アジア 13 カ国(バングラデシュ、カンボジア、インド、インドネシア、ラオス、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、スリランカ、タイ、東ティモール、ベトナム)から水道事業体や水道行政に関わる 32 名の幹部が招聘され、国内の水道関係者を含め約 280 名(主催者発表)が参加した。(主催者リンク https://www.jica.go.jp/information/seminar/2017/20170804_01.html)

同フォーラムは、持続可能な開発目標(SDGs)に謳われている「2030 年までに、すべての人々への、安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する」という目標を踏まえて、「次のステップのための行動を起こすー水道サービスの普及と質の向上、財源の確保、経営環境の能動的改善」をテーマとした。

基調講演の後、メインテーマのうち「水道サービスの普及と質の向上」をセッション 1、「財源確保」をセッション 2、「経営環境の能動的改善(ガバナンス)」をセッション

3 として全体議論が行われた。各セッションでは、まず参加各国のテーマについての取り組み事例の発表、そ



休憩時間の交流(右から 2 人目が鎗内)

の後参加者が 3 グループに分かれ、参加者が主ファシリテータとなって具体的な課題や取り組みについて議論が深められた。その後、各グループから議論の内容の報告と全体討論が行われた。3 日間続いた 3 セッション終了後に、全体総括が行われ、その内容が「横浜フォーラム宣言 2017」として参加者で採択された。

最終日は、横浜市水道の水源である山梨県道志村の水源林の現場視察が行われた。水源林の仕組み、保護について丁寧な説明があり、参加者からは多くの質問が出された。

◎参加した印象

前回(第 3 回)フォーラムにも参加したが、今回は、過去のフォーラムでの刺激や学びが実践に移されていたり、過去の議論が参照されるなど、継続の意義を感じ



全体議論 (courtesy: of JICA)



グループ討論 (courtesy: of JICA)



山梨県道志村 水源林の視察

じることが多かった。過去のフォーラムから継続した参加者も多く、ファシリテータやプレゼンテータには、今後のアジア水道を盛り立てて行く鍵となる人材も多く出てきているのではないかと感じた。また、こうした継続した参加者を中心に、アジアからの参加者、日本人参加者の間でもお互いに顔見知りが増え、意見交換の促進だけでなく、休憩時間の交流も活発になっている印象を持った。質疑や議論、交流といった双方向で内容の濃いプログラムで、参加者が、帰国後に「次のステップのための行動を起こそう」、と強く刺激するのに成功したと感じた。(了)

◎ フォーラムに参加して

大野雪子



私は大学で衛生工学を勉強しましたが、国内やアジア諸国での業務経験がなく、今回のフォーラムを通じてアジア諸国での水道事業の課題や工夫など多くの気付きがありました。特に印象的だったのは「貧困層への給水」に関するディスカッションです。以前、協力隊としてウガンダのスラム街で公共水栓や公衆トイレを建設

する NGO で活動をしていましたが、その時の財源は民間企業の CSR や国際 NGO などでした。ディスカッションの参加者からは、同じように CSR や政府・外部からの助成金で接続料を賄って、まずは水道へ接続するべきだという意見もありました。一方で水道サービス経営の持続性を確保する為にも接続費用を金銭もしくは労働のような形で支払わせるべきで、さもないと補助や助成の対象となっている地域に貧困層が集まってしまい、健全な都市経営にも影響が出かねないという意見も出ていました。両方とも、至極もつともな主張ではあるのですが、それぞれが想定している「貧困層」の経済力や水道サービスへの接続意欲など状況が異なるだけに、どの地域にも当てはまる最適解はないのだという結論でした。

ウガンダでは、貧困層のことは水道局ではなく NGO が取り組むものという認識が強かったのですが、フォーラムに参加していた水道局幹部たちには自分たちが解決すべき課題として認識しているところが大きな違いであり、後者の方がより共感できる姿勢だと感じました。懇親会では大学の同期との卒業以来の再会などもあり、水道事業について考え直す以外にも充実した3日間となりました。(了)

第 7 回 SDDC 報告 笹山 弘(JWWA)

SDDC とは？

ネットで調べると、“Software Defined Data Center”という語がヒットします。どうやらクラウドコンピューティングに関連した技術(製品)らしい。もちろん、WaQuAC の SDDC とは何の関係もありませんし、残念ながらこちらの SDDC がネット検索に引っかかることもありません。それほどマイナー？これで第 7 回を数えるというのに？

SDDC とは？(再)

そもそも、WaQuAC ネット立上げのきっかけとなったカンボジアの水道プロジェクトで、カンボジア側のキーパーソンが当時プノンペン水道公社(PPWSA)総裁だったエクソンチャン氏(現工業手工芸省(MIH)長官)でした。氏が何度目かの東京に来た折に、とあるワクワクメンバーがこんなところもあるよと新宿西口の「思い出横丁」に案内したところ、いたく気に入って、それ以来彼が来ると同様の店で歓迎会を開くことが恒例になりました。

おわかりでしょうか、SDDC＝小さい、暗い、汚い、安

い、なのです。もっとも近頃はホントに「暗い、汚い、安い」店は姿を消し、小さい＝こじんまりした飲み屋でガマンしてもらっています。別名「足軽会」＝皆、大将にはなれそうにないから？SDDC にふさわしそう。

今回は第4回アジア上水道事業幹部フォーラム(毎回横浜で開催)の前日に横浜駅近くの居酒屋で、カンボジアのフォーラム参加者6名を迎えました。前回の横浜フォーラムのときもこの店で開催したので、エクソンチャン氏も勝手知った様子です。初めてこうした店に来たカンボジアメンバーも、ビールを重ねれば、よくしゃべるようになり、ワイワイとにぎやかになりました。日本酒も飲みました。焼酎も飲みました。よくしゃべったけれど、よく飲んでいたので、しゃべった内容をほとんど覚えていません。皆で、記念写真を撮り、最後にカンボジアメンバーからお土産として胡椒をたくさんもらいました。かつて世界一と讃えられたカンボジアの胡椒、ポルポト時代にす

っかりダメになってしまったのが、品質の良い品が増えてきました。これ、倉田さんという日本人が復活、発展させたんですよ。(了)



〔後列左から〕佐々木、ソックハン(PPWSA)、鎗内、エクソンチャン、ポックチャン(MIH)、チエンセンヒーン(MIH)、
〔中列左から〕井上、山本、富岡、亀海、シムシタ(PPWSA)、クットグティアリッツ(シムリアップ水道公社)
〔前列左から〕笹山、中之蘭

Mr. Varich、成田に到着

8 月 23 日、タイ・MWA(首都圏水道公社)の Mr. Varich Boonprasert が神奈川県海外技術研修を受けるために成田に到着しました。約 7 カ月の日本滞在中で、日本語研修 2 カ月、技術研修 5 カ月を受けることになります。技術研修の内容は水質分析・浄水場運転・高度処理・水安全計画・リスク管理などの予定です。

この研修は 2014 年に MWA の Ms.Oil、2015 年にはインドネシアの Ms. Zainab が受けた研修です。過去の 2 名は神奈川県水道局の水質センターが受け入れ機関でしたが、今年は関東学院大学の鎌田先生の研究室が受け入れ機関です。WaQuAC-NET としては前



者同様、日本の生活に慣れて有意義な滞在になるようにいろいろなサポートをしていきたいと考えています。(文責：山本)

写真：左から二人目中国からの研修生、張磊さん、3 人目 Varich さん

◎ 新メンバー紹介 ◎ (敬称略)

➤ 七條 寛 (日本)

趣旨に同意いただける方を募っております。
入会は事務局まで。

WaQuAC-NET 会報 第 34 号

発行：2017 年 9 月 20 日

WaQuAC-NET 事務局

連絡先：waquac_net@yahoo.co.jp (鎗内)

URL：<http://www.waquac.net>

今後の活動予定

9 月 24 日	九州支部総会
10 月吉日	下村さん・帰国報告飲み会
10 月 10 日	会報 34 号 英語版発行
10 月 23-30 日	MWA 訪問受け入れ(日本水道協会 全国大会 発表・他)